現象學的傾向

坂田德男

醫者は精神現象をいか樣に考へてゐるのであるか。精神の病氣を取扱ふ醫者の學問の輓近の趨勢に於て興味ある潮流を私達は見出す。神經病學。精神病學の近頃の諸雜誌(主として獨乙の)には精神病理學の趨向を論じ、その方法、對象の問題の議論に入つたものが少くない。そして之が今精神科學の經つゝある運命ときりはなし難い交渉を保ちつゝ動いてゐることは、一般の深い學的關心と興味とを誘ふに充分な一つの問題ではなからうか。輓近、精神病理學がディルタイの心理學、フッサールの現象學等より蒙つた直接間接の影響は尠からぬものゝ如く思はれる。もとよりかの「世界觀の心理學」の著者カール・ヤスペルスが「一般精神病理學」(Allgemeine Psychopathologie)で主張する如き Methode にどれほどの將來を期待しうるかは問題であり、或はフリース派から出たクローンフェルト Kronfeld やシュナイデル等の純粹精神病學 reine Psychiatrie などが他の專門的精神病學家から受ける批評には一應の理由を認めることも出來る。例へば最近 Allgemeine Zeitschrift für Psychiatrie 82 Bd. 1 Heft(一九二五年)でカール、クライスト Karl Kleist はその論文「精神病學の現代の潮流」の中に精神病學に於る哲學的・心理學的、神經學的、體質論的四主要傾向を論評してゐるが、その哲學的、心理學的傾向を代表する者としてヤスペルス、クロンフェルト、ブムケ、シル

ダー、レヴィ等の名を擧げてゐる、そしてその傾向は一に「生の哲學」の流行に助勢せられて生じたものとして學的普遍妥當的價値を輕んぢ、クロンフヱルトが精神病學の基本概念を檢覈して、精神病學の本質を明にせんと試みた業績（Das Wesen der psychiatrischen Erkenntnis, 1926）に對しては、それが單に煩鎖なる哲學的概念究明に止まつて、たゞ問題を重疊せるに過ぎないものであるといひ、シヱナイデル等が、その本質を精神科學に求めようとする純粹精神病學 reine Psychiatrie の主張（K. Schneider, Reine Psychiatrie, symptomatische Psychiatrie und Neurologie 其他の論文）をも直觀哲學の獨斷的世界觀に基くものとして輕視し、ヤスペルス等の精神病理學に對しては次の如き批評を與へてゐる。Ich habe bei Jaspers und bei seinen Geistesverwandten immer den Eindruck, als ob sie die Geisteskrankheiten als eine Art Schauspiel betrachten, dem sie mit Staunen und Ergriffenheit, Mitleid und Bewunderung folgen. Sie werden selbst hingerissen und reden in klingenden Worten vom festlichen Zug der Visionen und sind glücklich, wenn sie dem diese rätselhaften Welten durchschreitenden Kranken eine Strecke weit nachfühlend folgen können. Es ist das eine intuitive künstlerische Haltung, die am deutlichsten aus Prinzhorns bewundernder Darstellung der Bildnereien der Geisteskranken spricht.

思ふに氏の如き專門家の批評にも相當の理由を認め得ることは私も首肯するのであるが、一面新しき傾向の學的本質に對する洞察に於て缺けるところもあるのではなからうか。精神現象の理解と洞察に向つて自然科學的概念構成から生れた理論を以て對しようとする、やゝ押つけがましい主張とも考へられるではなからうか。これ等の問題を論じるのは今の場合ではないがとにかく獨逸精神

病學に於て最近「哲學的乃至心理學的趨向」が、かなり濃厚な色彩を學界に附與してゐる現狀はこれを蔽ふことが出來ない。そしてそれが主としてディルタイやフッサールなどの影響を被ることが多大である所以はたとへば「性格と體質」の問題に關する新しい領域を開拓してゐるクレッチュメル Kretschmer の「醫學的心理學」の如きにさへ「Motivation」や、「Einstellung」などの言葉が隨所に散見してゐることに依つても一般を窺はれると思ふ。

私はこの傾向を理解するためにルドヰッヒ、ビンスワンゲル Ludwig Binswanger が「神經病學、精神病學雜誌」Zeitschrift für die gesamte Neurologie und Psychiatrie 八十二卷ブロイラー紀念號（一九二三）に揭げた論文「現象學に關して」Über Phänomenologie の要領を紹介せうと思ふ。もと原文は一九二二年（十一月二十五日）チューリヒに於ける精神病學會の講演に基くものであつて、內容を分つて一、自然科學と現象學。二、現象學的方法。三、現象學と精神病理學とされてゐる。前二項は必ずしも現象學に近からざる人の爲に、現象學の基本概念を說明してゐるに止り、第三項で著者の現象學的傾向に對する理解ある同情を看取し得る如く思はれる。この理由で私の紹介は前二項を省略したものであつて、更に第三項の、そのまた要點をかなり自由に抄譯したものにすぎない。ビンスワンゲルの如何なる人であるかに就てはよく知らないのであつて、氏が又現象學に對してどれほどの深い理解を持つかはわからないが、私は單に特殊科學としての精神病學に於ける現象學的傾向を代表する一つの例として之を見たいのであつて、必ずしもかゝる方面の專攻者ではないが我邦醫學者中這般傾向の紹介や業蹟を試みる人が比較的僅小である樣に思はれる爲、本誌をかりて蕪雜な抄

錄を載せる次第である。

× × × ×

現象學と精神病理學との交渉關係はいかに解すべきであらうか。精神病理學はどこまでも經驗科學、事實の學問であるから絕對普遍性に於ける純粹本質(reine Wesen)の觀照といふことはその望むべきところでもなければ爲し得るところでもないしかしながら他方にあつて、純粹現象學が精神病理學の關る領域にまで、その方法を及ぼしたからといつて何等之に反抗すべき理由を持たぬ。反つてその學の根本概念を現象學的に明かにすることに依つて自己の研究が促進を受け鮮明せられることになる。すべて學問が益々その學問の名前に値する樣になるといふことは、つまりその用ふる概念が段々純化せられ明瞭になり、その概念の向ふ內容が一層直觀的になるといふことである。かく考へると精神病理學は事實を研究するものであり、現象學は本質を研究するものとして、二者の間には、深い差別があることゝなつてくるのであるが、しかし他方に於て、精神病理學的現象學 psychopathologische Phänomenologie といふ言葉を用ふることが充分な意味を有することを今日私達は理解する。これは純粹本質の高みへまで到達することが出來るものではないが、さりとて亦記述的心理學に從つて記述的乃至主觀的精神病理學とよばれてゐるものと同一視することも出來ない一つの現象學をいふのである。精神病理の現象學は大低いつもこの誤解を蒙つてゐる。蓋し現象學のこみ入つた裝置を持出してきても結局これまですでに記述的精神病理學が到達せうとしてその道程にあるものに到達するだけのものであれば、何故そんなことを試る必要があるであらうか。この質問は尤である。從來病的精神現象を精神病者の陳述するまゝに記述し、或は患者の陳述を基にし、

可及的理論をはなれて theorienfrei 吾々が述べうる樣記述するといふことが精神病理學の一つの分派をなしてゐたのであつて、有名なブロイレル Bleuler が精神分裂症を分類し記述した見地の如き正にこの適例といはなければならぬ。この「出來るだけ理論をはなれて」といふ要求は現象學の時代が到來するまでには方法論的に純粹に遂行しえられなかつたのである。尤もこの點を度外視しても從來の記述的精神病學と現象學的精神病學との間には大なる差異があるから兩者を方法論的に分離するが至當である。たゞ實際に當つては兩者が絶えずその研究を相補ふことはいふまでもない。何とならば現象學者は病理學者が妄想とか、幻覺とか、自家籠城(アウチスムス)とかの概念を記述分類することを要求し、その研究の出發する地盤を與へられ、さしあたつての理解に資することが出來、更に一方精神病理學者は常に新しい、解明を經た、直觀の材料を目前にすえるため、現象學の立場からの研究を必要とするものだからである。

先にすゝむまへに豫め考へて置かなければならぬ事實がある。それは精神病理學の土臺となるものは主として外的知覺、卽ち他の自我の知覺であつて、他ならぬ自らの自我の知覺といふことは比較にならぬほど乏しいといふことである。研究の對象は內官、內省に於て之を捕へることが出來ずそれに依つて他の精神生活を知る外部知覺に依つてとらへるといふことである。この外部知覺は以前連想說、類推說の基礎から說明しうると考へられ、今日でもなほ廣く感情移入說が勢を持つてゐるが之は現象學者が旣に詳しく研究したところのものである。その研究の極めて重大な結果に觸れることはこゝに出來ないが、たゞ外的知覺も一種の(「內的」)感性的知覺であつて、之に依り私達が他の精神現象を直接理解するのであるといふこと

を言つておけば充分であらう(Scherer)

現象學的方法をよく理解するためにはまづ自然科學的立場からの認識を知つてをく必要がある。精神分析學もこゝに一顧するの必要があるであらう。次に記述的方法の行ふところを見極めて、最後に之と現象學的方法とを對比せしめるのが都合がよい。自然科學的立場に於て、私達はたとへば精神病者の語る言葉の意味に注意して、之に向つてその話方がどんな話方であるかとの判斷を下しその判斷を基礎にして推論を行なつて　何といふ病氣にかゝつてゐるかを知り、徵候の概念を病氣の類の下に論理的に屬せしめる。こゝに學者の行ふところは思惟作用の一つである包攝推理である。かくしてこの上になほ他の思惟作用が重なり「經驗」が集まり、最後に一々の徵候を「說明」するための自然科學的理論が生れることゝなる。

精神分析も自然科學的理論の中に終始する。精

神現象を理論をはなれて記述する立場と雖も、その認識は思惟作用を出でない。

精神病理的現象學者の行ふところは之と異る。記述を行ふ精神病理學者のするところは異常精神現象を級、類、種に分類して、其分類を系統化することである。特徵に從ひ分類せられた病的精神現象の系統が全體として健康な精神現象の分類と對比せしめられる。更に彼の行ふとはその分類の系統乃至その個々の類、群が生ずるための諸條件を探搜することである。かくていつも個々の病的體驗、病的機能は類の一特殊例として視られる。彼の行ふところは包攝であり、思惟であり、判斷である。しかるに現象學者のなすところは常に言語の意味するところを現前せしめる vergegenwärtigen とである。內容、意味からして對象の方へ、物の方へ、言葉の意味が指し示してゐる體驗の方へ向つてゆくことである。彼は語の概念から判斷をひきだしてく

るかはりに語の意味の内へ身を入れ inleben ようとする對象の動くところに一つとなるのである。

à force de regarder l'objet se sentir y entrer! 個々の特徴、性質を引き出し、數へ上げるのではなく、身を入れて生き、我をそこに入れこむのである。たしかに現象學者も亦性質や特徴をとらへた精密な記述を必要とはする、しかしそれは性質、特徴そのものゝ爲に求めるのでなく、概念の要素としてそれを使用するが爲ではなくて、それからしていつも物 Sache へ、對象そのものゝ直觀へ遷らんが爲である。この爲にはしかし物 Sache に、現象そのものに由來する如き特徴のみ役立つのであつて、その成立條件や他種類の現象との關係を示す特徴などは役に立たない。かくてこゝにも亦現象そのものに、異常な、極めて複雜な意識現象に屬する諸規定のみを示す現象を分析することになる。この意識現象を間接に固定することは出來ない。かくして體驗を現象學的に特殊な「本質」として、恐らくはあまり近くもなく、明瞭にでもなく、亦「純粹」でもないにしてもとにかくある一つの限定、完結の内に於て知りうるであらう。

かく精神病理學的現象を現象學的に考察するにあたつて本質的なことは、現象を決してたゞ一つ孤立した現象として見るといふのでなく、その現象は一の自我、人格を背景として生起してゐるといふことである。或は私達が現象を、いつもこれこれの特質をもつた人格の表現或は傳表として見るといふことである。特殊の現象に於て該人格が自らを表出し、又逆に現象を通じて私達は人格の内を見るのである。私達は精神病者の言葉をとほしてその特異な人を見てゐる。卽ち私達は倫理的に或は世界觀的に變化を蒙つた人格を見てゐるのであつてその言葉をかゝる人格の世界觀の表現手段として見るのである。その表現はいつも強く「象徴

的」であり、「象徴的比喩」に依り、或は「感覺に必要な調音を與へる、出來るだけ具現的な比喩に依つて」ゐる。これらの事一切を現象學的に詳しく捕捉する爲には、なほ私達に一般の人格特性學Personalcharakteristik も、精神分裂症患者のそれも充分ではない。フェンダー Pfänder はその性嚮の心理學（フッサール年報一、三）に於てかゝる Personalcharakteristik を立てゝゐる。人格の本質を捕捉し、現象學的に固定し得るためには一定の現象學的根本概念を必要とする。私がこゝに示し得たことは、精神病理的現象の現象學的考察はいかなる場合にも精神病理的機能の種と類を求めることを目的とするものではなくて、まづ病める人格の本質をと目指し、之を直觀にあらはすことを目的とするといふことだけである。勿論個々の現象をも亦直觀的に現實化しうる、まづ感覺的具體的に、次には多少範疇（カテゴリアル）的、抽象的に。たゞいつも具體的現象に於ても、その抽象的本質內容に於ても體驗を持つ人格が直觀に與へられてゐなければならぬ、そして現象と人格との「間に」、確實に固定しうる一般的本質聯關を眺めることが出來ねばならぬ。今私達は精神病理學の領域に於ては未だ全く初歩を踏み出したに過ぎぬ。

〔例へばヤスペルスが一九一〇年になした嫉妬妄想に關する仕事は方法的に現象學の立場を重んぢた最初の精神病理學上の仕事であるが、その中に既に「過程」Prozess と「人格の發展」Entwicklung einer Persönlichkeit との區別をなしてゐるのは、かゝる意味で正しく意味深い出發點である。尤も從來クレーペリン、ブロイラー、ウィルマンス其他もこの區別をなしてはゐたけれども、只從來の如く外面的臨床的に特徴を區別するのではなく、「內在的心理學的」區別をなした限り、原理的に新しいものが存在するのであ

る。從來分離症 Dissociation 常同症 Stereotypie 痴呆症 Verblödung の如き臨床的特徴は患者の精神内に、その人格自身の型類から導きうる病的發展とは反對の、「人格と緣のない」、全く新しい過程の行はれてゐることを示しはしたが、今や直觀が「人格の統一の直觀的捕捉」das intuitive Erfassen der Einheit der Persönlichkeit（ヤスペルス）が、その人に何かヘテロゲーンな要素が接木せられてあるか否かを決定するのである。「人格の發展を統一的に捕捉することが出來ない場合、吾々は新たなるもの、その素質にとつては異質的なるもの、發展からそれたもの、發展ならずして過程であるものを認めるのである。」とのヤスペルスの言葉が fruchtbar な思想であることが其後證せられ、精神病學の文獻中での現象學的業績では最近の仕事に於て一層方法的に發展せしめられた、(Kronfeld, Über schizophrene Veränderungen des Bewusstseins der Aktivität. Zeitschr. f. d. ges. Neurol u. Psych. 74. 1922 を見よ。) 本來の非人格化 Depersonalisation の體驗と「能働性意識の視如せる原始的に分裂症的なる體驗とを鋭く純記述的に分離せしめて、クロンフェルトはこゝに內在的、心理學的、「記述的本質的」原始的精神病徵候を得たのであるが、之はかの「外面的」臨床的徵候の如くに、精神の連續體の內部に於ける異物、連續の破壞者をあらはしてゐる。極めて限局的な個々の心理運動性行動に於て見る、能働性意識の缺如は（例へば患者が、「自分が叫んだのではない、聲帶神經が唸つたんだ」といふ如き）人格とは緣のない、人格の發展からはそれて、「あたかも深淵に依つて人格から切りとられた」過程特徴をあらはしてゐるが、こは精神病理的現象學に屬し、その限り個々の病的體驗と、人格の病的破壞との間の關係に

於ける本質を洞觀せしめるものである。」

之私達が精神分裂症そのものに就いて、又本質的なその特質、自家籠城に就いて何故かくも僅かなる直接の知識しか有してゐないかの理由でもある。私達の例は次第に、私達が自家籠城といふ言葉を用ふる世界へ導かないであらうか。しかも私達はこの世界を見直接に知覺することが未だ全然出來ないのではないのであるか。私の意味するところと示す爲、もう一度自家籠城の例に就て自然科學と現象學の方向とを相對比せしめて見よう。

自家籠城とは何であるかは私達は知らない。私達はその言葉も持ち說明も持つてゐるけれども、自家籠城の心理學的現象學的本質を知つてはゐない。ブロイラーの敎科書には「この現實から遊離することを、內部生活Binnenleben の相對的優越、絕對的優越と一緒に自家籠城と名ける」といつてゐるが、これではたゞ、どんな條件の下に私達が自家籠城を口にするかといふことを說くに止り、自家籠城がどんなに見えるかを語るものではない。

又たとへ自家籠城の特徵をすつかり數へ上げても自家籠城そのものは私達の眼前に現はれては來ない。卽ち、自家籠城者は外界に無頓着である、彼に最も密接な、最も大なる關心を持つべき筈のものに對して我不關である、現實との交涉をなす力が乏しい、外界からの影響に對し的を外れた反應をする、思ひ附き衝動に對して抵抗力がない、內部生活が病的の荷重を受けてゐる、願望や恐怖を、直ちに充されたもの、現實のものとして見る、思考は情緖によつて指揮せられ、比喩や不完全な槪念や類推語などを使ふ。これらの場合現實それ自身の領會に對する感じSinn がなくなつたのではない。更にまた正常人、ヒステリー者、睡眠等の自家籠城といふ言葉が用ひられ、一般にいかなる條件の

下に自家籠城的思考が論理的現實的思惟の上に優勢を占めるかゞ研究せられる。子供に於て、論理の達し得ない物(「最後の物」letzte Dinge を論ずる人に就て、強い情緒に就て、神經症に於て、最後に連想の關聯が弛緩した場合、精神分裂症に於て。なほ「自家籠城的作用」の系統發生上の起原も亦研究せられてゐる。

(これと並んでユング Jung の意味に於ける內轉說 Theorie der Introversion フロイド Freud の意味に於ける Narzismus 及び更にこれらの學說の並び立つ關聯を考へることが出來る、これらはいづれも甚だ有價値なものではあるが、正にその學說としての性質上、自家籠城の直接の知識はこれらのものに於ても亦缺けてゐる。)

精神病學はブロイラーに負ふところが大きい。彼は尨大な材料を精神病學にもたらしてくれた。然し同時に彼はその材料から家を建て上げるといふ極めて困難な課題をも共に與へたのである。或は建物は既にある程度まで立てられてあると考へてもいゝが、その家はまだ骨組だけの家である。梁木は組まれてゐるが、間の空隙はまだとぢられてゐず、どこからでも風が漏れ入る、このすき間を壁で充たし、人のすめる家にしなくてはならぬ。比喩を言はずに言ふと、ブロイラーは勿論彼の記載した事を自ら見、又は「感じた」のである。氏の精神分裂症に關する著書の價値は理論に基くものではなくて、分裂症の精神生活への深く廣い「感情移入」に基くのである。だがそれにしても屢々その持てる以上を與へようとしない彼の自己批評的な告白を聞く。告白に云ふ。「これら一切の事は記載するより感ずる方が容易である。」或は次の樣な告白もある。自家籠城の世界は「患者にとつては實在であつて、その現實に對する關係を一般的に記載することが出來ない」(Jahrbuch Bleuler-Freud

IV, s. 13) さてこの場合單に感せられるもの、一般的に記述することの出來ないものこそ、現象學の方法を以てまづ明かに直觀的知識にもたらし、次で概念に於て捕へる必要のあるものである。

こゝには、たゞそのプログラムだけをスケツチするにとゞめるが、次の如きプログラムに依る研究が豫めなされてゐて、初めて自家籠城(アウチスムス)が何であるかを知つたと云へるのである。

一、私達はまづ一般に現實的外界の體驗の現象學を要求する、卽はち「現實の外界」といふ現象が自家籠城者に於て形造られる仕方を。しかし私達はまだ正常人に於けるこの「外界の體驗」の現象學をやつと始めたばかりなのである。(H. Conrad-Martius: Zur Ontologie und Erscheinungslehre der realen Aussenwelt. Husserls Jahrbuch III)

二、私達は正常人に於て、知覺として與へられたものと想像として與へられたものとの關係、及び自家籠城(アウチスムス)者に於て知覺として與へられたものと、想像として、幻覺として、妄想として與へられたものとの關係に關する一層立入つた研究を要求する。之には幻覺、假性幻覺、妄想の現象學が必要となつてくる。又多數の觀察からしてかの「關係固定」の作用を現象學的にとり出し、その本質を純粹に記載しなくてはならぬ。作用の中には明かに統一的對象的世界が與へられてゐるが、之私達が實在的外界現象として體驗するものに相應するものでもなければ又私達がそれを現實からの疎隔として、全く消極的、外面的の記載をしてゐるところのものに相應するのでもない。私達はこの場合自家籠城(アウチスムス)的實在と「實在的」の實在といふ二つの實在を取扱ふのではなく、かの「關係の固定」の作用に依つて構成せられた唯一の實在を扱ふのである。

三、しかし外界物に對しては知覺し、表象し、認識する以外になほちがつた態度をとることが出

來る。卽ち評價し、價値づけをなし、愛し憎み、意欲し、逃避し、アクチーフに働きかけ、パッシーフに從ふ等の如きである。これらの多くの「意識の態」或は作用に就て、純粹にアッフェクチーフな、或は感情的な作用、行爲と、本質と價値に向けられた範疇的なそれとを別つ必要がある。たとへばシュウェンニゲル Schwenniger が外部から見て、現實からの離叛、自家籠城的閉鎖として見られるところのものをブェンダーの宥和分離の說を根據にとつて記載した如きは一つの進步を意味してゐる。(Zeitschr. f. d. ges Neurol. u. Psychiatr. Orig. 77) こゝに一つの實體的に „substantiell“ 精神的なるもの、個有の精神領域を見る、之を根柢にして現實からの遊離を「宥和」、周圍との親交、「主觀と對象との貫透」の障碍として記述することが出來るのである。勿論これはたゞ古い事柄に新しい名前をつけてみただけのものに止つてはならぬものであつて、事實その意味するところをよく知らなければならぬ。これにはまづ第一に、自家籠城者に於ける宥和分離なる作用が、正常人、健康人のそれとどこがちがふかといふことを示さなければならぬ。卽ちその特殊な性質を示さなければならぬ。エトリ Oetti は同胞に關する宥和の障碍を論文中に指適してゐる。(Das Gemeinschaftserlebnis der Schizophrenen,) (勿論こゝに問題となる事柄は既にブロイラー自身の知つてゐたことであつて、精神分裂症では早くから、人と人との間の交通を支配する感情が萎縮することを記載してゐる。Schizophrenien s. 39) 彼の主張するところはこの場合第一に變化を蒙るのは社會價値、社會規範であつて、之等がその價値を喪失することが根柢となつて始めて、社會的努力、社會的抑止がなくなつてしまふといふのであるが、之は正當な考である。之に依り表情運動、言語、書字にも變化がくる。なほ

シュウェンニゲルは價値感の喪失乃至變化を、從つて一般的價値・當爲の秩序に依り指導せられる仕事が變化を來すことを指適してゐる。

四、かくして範疇的直觀、最廣義の直觀の作用或は審美的、論理的、倫理的、形而上學的、宗教的本質と價値を原始的に、又は直接に悟了し或は認知することが質的にも量的にも變化することを知るに至つた。これ等の場合甚だしばしば、之がたゞ喪失したとか低下したとかいつて濟ますことが出來ず、質的に違つたもの、他のものとして扱はねばならぬことはグルーレ Gruhle が「動機附けの體驗」Motivationserlebniss に關して主張してゐるところであり (Zeitschr. f. d. ges. Neurol. u. Psychiatr. 77) ヤスペルスは之をヘルダアリンとフアン、ホツホに就て立派に印象深く敎へた。この樣に價値の世界に對する異つた態度の取り方といふことを以てする方が、幻覺・妄想が出現するとか、內部生活が優越するとかいふことを以て說くよりも、自家籠城(アウチスムス)そのものは一層立入つてその特徵が明かにされる。現象學的には外界及び自己に對する態度の變化といふことは、個人が價値に向つて示す態度の變化を根柢にして一層容易に捕捉することが出來る。精神分裂症の自家籠城(アウチスムス)なるものゝ本質・中核が此處にある。こゝでは自我と價値界との間に支配する緊張を異にするのであつて之を正に現象學的に捕捉すべきである。ヤスペルスはこゝに大なる進步の最初の一步を踏みだしたものであつて、先づ彼は(正常なる)世界觀の心理學を書き、次で從來見るを得なかつたほど深く分裂症の自家籠城(アウチスムス)そのものゝ內面を明かにした。ストリンドベルヒとフアン、ホツホに關するヤスペルスの仕事は現在最良の精神記述たるに止らず、又分裂症(シゾフレニー)の精神病理學的現象學の一標石である。又ヤスペルスが既にその「精神病理學」の著(一九一

一年)の中で「分裂症の schizophren と稱するもの全體についての直觀」とか、分裂症の環境などの言語を用ひてゐるのを忘れてはならぬ。だが、氏に個有の學問的用意と懷疑を以て、彼はいつも私達がこの全體をとらへうるものではなく、たゞその個々のものを澤山列擧するのであり、根本現象は常に患者と接觸しての個有經驗に於て經驗し得るに止ると說いてゐる。さて吾々が分裂症の schizophren と名けるもの全體をも捕捉出來るかどうかは指いて問はないとして、この自家籠城(アウチスムス)の全體の直觀なるものは正に現象學的に確定し固定し、學問的に處理せられなければならぬ。ビルンバウム Birnbaum はこゝに一つの方法 Methode が横つてゐるのであるが、たゞ之が、その自然科學、經驗科學の束縛性のために、精神病學の理解の範圍を逸脫すると、その方法が單に主觀的、感情的確實性しか與へえないものと說いてゐるが、私達はこの方法が多數の人の學問的協力に依つて精神病理學に於ても一つの普遍妥當的な方法にまで完成することが出來るといふのである、言葉を換へれば、その方法の科學性、嚴密性をこゝに於ても證明することが出來、既に文獻上證明せられてゐるといふのである。ビルンバウムはヤスペルスの方法を單に主觀的なものと誤解してゐるが、これにはその主觀的なおどおどした、用心深い言表し方にも責任がある。それにはなほヤスペルスは學派といふ意味で現象學の傾向には屬してゐない人なので現象學的に確定せられた概念を用ひて述べてゐないといふ事情も加はる。(ヤスペルスは周知の如く現象學の領分を靜的に理解しうべきものに限つてゐる、しかし他方又彼は理解心理學 verstehende Psychologie の領域では、先天的の、理想的典型的の、經驗に基礎を持たない認識を認めてゐる、だが本質認識といふ言葉は用ひない。)とにもかくビ

ルンバウムは誰にもまして、一つのことを明に認めそれを言ひ表はした。卽ちこゝに自然科學的方法以外の一つの方法があるといふことである。私達も實にそれから出發したのである。

だが自家籠城（アウチスムス）の現象學の方へ還らう。分裂症患者が價値の世界に向つてとる態度では、まだ自家（アウチ）籠城（スムス）は現象學的にとらへられてゐない。自家籠城（アウチスムス）の人そのものを心の眼の中に受とらねばならぬ、それはたゞ、述べられた一切の現象から逆の途をとつて「自家籠城の人」といふ根本現象に還ることに依つて出來る。現象學はこゝに現代一般心理學の傾向、特にベルグソンの直觀主義、ナトルプの再構成の心理學と接觸する。何とならば現象學といふもたゞ、心理學及び精神病理學がその客觀化的科學から主觀化的學問にうつりゆく途上に受けた動搖の一つを意味するに過ぎないからである。(Binswanger, Einführung in die Probleme der allgemeinen Psychologie)

終りに精神病學の現象學的方向に對する關係の問題に答へなければならぬ。精神病學が醫學、從つて應用生物學の一分枝である限り、それはどこまでも自然科學である。精神病理學的現象學はそれとは先づ本質が異ふ。この兩者間にも橋梁が架せられるべきであることは文獻を一瞥すれば充分である。私はヤスペルス（精神病理學 Psychopathologie）とクロンフエルト（Wesen der psychiatrischen Erkenntnis）の試みを名指してをく。私自身としてはこの試のいづれにも贊し難くレキン、クルト、シェナイデル其他と共に精神病理の現象學に出來るだけ自由と獨立とを許す立場をとる、而してこれは精神病理學がそれより利益をえんが爲には何よりも內在的意識形態の純記載的本質學としての現象學の方向に從ふべきものでなければならない。

以上述べたところを總括すると次の如くになる

一、精神病理學はどこまでも經驗科學、事實の科學であるから、決して絶對普遍性に於る純粹本質にまで達することを望み得べきでなく、また達しえない。しかし精神病理學はその根本概念を純粹現象學的に明かにすることに依つて、それ自身の研究を促進せしめられ明かにせられることを期待するものである。

二、精神病理の現象學は記述的心理學、乃至「主觀的」心理學ではない、しかし兩者は實地の研究上常に互に接觸する。

三、記載を事とする精神病理學者は言葉の內容、意義からすぐ言葉の概念をつくりあげ、それから判斷をひき出し、次に推論を行ひ理論を立て、その助けによつて「徵候」を說明し得る樣な理論を立てる。精神分析者の方法にあつても形式的には全く同一である。——精神病理的體驗を分析する現象學者は同じものを精神病理的類概念內に固定された種(Species)と見做し、次に思惟に依り之を處理するといふのではなくて、患者の表現である言葉が彼の內に起した意味の內に身を入れて生き言葉に依つて示唆せられた異常な精神現象そのものを洞觀せうとするのである。それの他の異常精神現象との連關、それの成立の條件を反省するのではなく、該體驗自身に內在し、體驗自らの內に見出しうる樣な特徵のみを搜し求めるのである。かくて先づ第一にいかなる體驗にあつても體驗の行はれる「人格的」背景が明になる、言葉を換ふればいかなる體驗に於ても、體驗せる人格が語り、いかなる體驗を通じても私達は體驗せる人格の內を見るのである。たゞ精神病理學的現象學の人格特性學 Personalcharakteristik が未だ缺如してゐる爲私達がまだ全く初步を踏み出したところにゐるに過ぎない。

四、私達が自家籠城（アウチスムス）及び分裂症一般について僅かな直接の知識しか持つてゐないのも之に基く。

五、自家籠城（アウチスムス）の例に就ても上に云つた研究方向の區別を明瞭にすることが出來る。

自家籠城（アウチスムス）についての詳しい知識は次のことを前定としてゐる。

(一)、精神分裂症患者に於ける現實的外界の體驗の現象學。

(二)、分裂症患者の幻覺的體驗の現象學、これは「思想と物質との間の關係固定」の例で說明することが出來る。幻覺的、妄想的體驗に內在する關係固定の特徵を示さねばならぬ。(三)、(四)、患者の情意的體驗の現象學及び價値の世界に向けられた、範疇的な體驗の現象學。これに關しては就中ヤスペルスに依り研究が始められた。

六、現象學は決して純粹に主觀的なる、「單に主觀的、感情的確實性をしか與へない」方法（ビルンバウム）ではない。現象學こそは精神病理學の領域にあつて、はじめて科學的普遍妥當性の證明をあたへなければならぬ、之は他の學問領分に於ては多數者の協同に依り、既に齎されたものである。

七、フッサールの現象學は心理學が、客觀化的科學から主觀化的科學へ遷る途上に歷た動搖の一つにすぎない。現象學以前にもすでにベルグソンの直觀主義、ナトルプの再構成の心理學が同じ意味に於て働いたのである。

八、精神病が醫學從つて應用生物學、從つて又自然科學の一分科としては、精神病理學的現象學はまづこれとは本質のちがつたものである。既に兩者の間に橋梁は架せられた。（ヤスペルス、クロンフェルト）。しかし當分は出來るだけ兩者をはつきりと分離し對立せしめ、從つて精神病理學的現象學に出來るだけ大なる自由と獨立とを許すことが兩者にとつて最も利するところある樣に思はれる。